

新宿區(舊牛込區)における身體的 榮養狀態調査報告(その4)

東京女子医学専門学校衛生学教室(主任 吉岡博人教授)

日 比 貞 子
ヒ ビ サダ コ
松 田 摩 耶 子
マツ タ マ ヤ コ

(受付 昭和 23 年 6 月 29 日)

I. 緒 言

さきに旧牛込区の身體的榮養狀態について、昭和 21 年 5 月より同 22 年 8 月にいたる調査の結果を種々なる方法により種々なる角度より研究し、それらの結果を 3 回にわたり本報告(その 1)、(その 2)、(その 3)⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾において報告した。しかして、今回は前回までに報告しなかつた事項について補足する意味において追加報告を試みようと思う。すなわち、性別症候別については昨年 11 月以後 1 ケ年間の集計せるものそれを、血圧に関しては本報(その 3)において記載しなかつた 1 部を、また体温、脈搏に関しては今回始めて発表するものである。

II. 調査方法

調査方法に関しての詳細は前 3 回の報告にて詳述せしところであり、特に調査項目及びその方法に関しては本報告(その 1)を参照されたい⁽¹⁾。しかして、前回までに記載しなかつた事項及び今回の研究方法において必要なるもののみを記述することにす。

1) 資料は昭和 21 年 5 月より、同 8 月、11 月及び同 22 年 2 月、5 月、8 月の 6 回にわたり行つたもので、その中 1 部報告済みのものは該当事項のみ除外し、調査洩れ及び不明瞭なるものは凡て除外した。

2) 体温測定：体温は測定時間、即ち午前、午後によつてもこなるこなきがきらかであり、常に一定時間に行うべきが理想的であるが、諸種の事情より不可能なため午前 9 時～12 時、午後 1 時～4 時迄の間に行つ

たものである。体温計は柏木及び仁丹の 1 分計をもつて静止倚坐位の狀態にして腋窩に 5 分間挿入し、その示度をさり、特に 36°C 以下の者については再度の検温を行い、すべて可及的慎重にしその正確性を期した。

3) 脈搏測定：脈搏は暫時静坐させたる後正確に攪骨部において、必ず 1 分間の脈数をかぞえた値である。なお、調査時期及び時間をここに集計せしものであるが、体温、脈搏ともに 2 月、5 月、8 月、11 月の 1 ケ年の各期にわたるものであり、時間も同様であつて、まず数値は凡て 1 ケ年の平均化されたものを見做してさしつかえないであらう。

III. 調査成績

1) 性別症候別榮養狀態

まず、第 1 表に示したごとく、13 項目について調査せるものの症候發現状況を性別に見ることにする。ここに掲げたものは、昭和 21 年 11 月、同 22 年 2 月、5 月、8 月の各期における 4 回の成績の集計である。しかして、この表よりあきらかなごとく、体重減少は男子 54.18%、女子 53.55%にして、性別をとわず最高率をしめし、男子の方がわずかながら高率である。体重減少に関しては特に詳細に本報告(その 3)において記述したから参照され度い⁽³⁾。

ついで、厚生省有本課長による全国の調査によると⁽⁴⁾、榮養不足に原因すると思われる種々の諸症候の中發現率の高いものは都市、農村を通じて最も多いものが月經異常と母乳分泌不良であり、

第 1 表 性別 症候 発現 表

症 候	男 子			女 子			合 計		
	実数	被検者に 対する%	順位	実数	被検者に 対する%	順位	実数	被検者に 対する%	順位
1) 体 重 減 少	175	54.18	1	279	53.55	1	454	53.79	1
2) 貧 血	81	25.08	2	168	32.25	4	249	29.50	2
3) 口 角 炎	53	16.41	4	68	13.05	7	121	14.34	5
4) 舌 炎	6	1.86	8	18	3.45	9	24	2.84	8
5) 腱 反 射 消 失	59	18.27	3	185	35.51	3	244	28.91	3
6) 浮 腫	40	12.38	5	166	31.86	5	206	24.41	4
7) 毛 孔 性 角 化 症	6	1.86	8	13	2.50	8	19	2.25	9
8) 慢 性 下 痢	19	5.88	6	18	3.45	9	37	4.38	6
9) 月 経 遅 延 又 は 無 月 経				42 (157)	26.75	6			
10) 脈 数 減 少	12	3.72	7	16	3.07	11	28	3.32	7
11) 母 乳 分 泌 不 良				13 (30)					
12) 角 膜 乾 燥 又 は 軟 化 症	—			—					
13) 骨 発 育 不 全	—			—					

附 男子被検者 323 名, 女子 521 名。() 内は被検者該当数を示す。

これについて、腱反射消失、口角炎、貧血となつている。これを本調査と比較してみるに、本調査においても前記症候はあきらかに高率を示している。すなわち、体重減少について母乳分泌不良、貧血、腱反射消失、月経異常、浮腫、口角炎の順位である。ここにおいて熱量の不足はともかく、全般的にみて栄養摂取が依然として質的、量的に不均衡なることが明瞭にうらがきされているので

ある。

また、性別の差異についてみるに、男子において体重減少、脈数減少がわずかながら高く、ついで口角炎がやや高く、慢性下痢は女子の 1.5 倍の高率である。しかして、女子に高率なるは浮腫及び腱反射消失において最も著明であり、この性別の差の有意性を χ^2 により検すると、(第 2 表及び第 3 表参照) 浮腫は $\chi^2=23.40$, $P<0.001$, 腱反射消

第 2 表 浮 腫

浮 腫 \ 性 別	男子	女子	計
浮腫あるもの	40	66	206
浮腫なきもの	283	355	638
計	323	521	844

$$\chi^2=23.40 \quad P<0.001$$

失は $\chi^2=17.64$, $P>0.001$ にしていずれもあきらかに有意である。その他貧血及び毛孔性角化症は女子において高率である。

なお、月経異常及び母乳分泌不良は全国における都市農村を通じて最高であり、当区においても 2 割 5 分及び 4 割にも達する発現率であり、食料事情の窮乏は経済問題とからみあつて、多くの女

第 3 表 腱 反 射 消 失

腱 反 射 \ 性 別	男子	女子	計
消失せるもの	59	185	244
正常なるもの	264	336	600
計	323	521	844

$$\chi^2=17.64 \quad P<0.001$$

性の心身の過労を物語る重要な症状の一つの証拠ではなからうか。さらに症候発見数の性別の平均値をみると、男子は一人当たり 1.40 の症候を有することになり、女子は一人当たり 1.90 の症候を有することになる。すなわち、女子の方が 0.5 症状多く、ほとんど 1 人平均 2 症状を有する状態である。

2) 体温よりみたる身体状況について
 体温を性別年齢別にみるに次の第4表のごとく
 である。この表によつてもわかる様に、まず注目
 されるのは、低体温者、即ち 36°C に達しない者

の非常に多きことである。そこでこの低体温者に
 属する者の割合をわかりよくするため次の第5表
 に一括してみよう。いまかりに個人的な平熱が不
 明であるし、また、その栄養状態如何による体温

第4表 性別年齢別体温度数分布

体 温	男							計
	0~9才	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~	
~35.5°	—	3 (3.80)	—	1 (5.55)	3 (13.64)	1 (3.45)	1 (9.09)	9 (3.41)
35.6~35.7°	1 (1.25)	2 (2.53)	4 (16.00)	—	2 (9.09)	4 (13.80)	3 (27.28)	16 (6.06)
35.8~35.9°	1 (1.25)	6 (7.59)	—	2 (11.11)	3 (13.64)	3 (10.34)	1 (9.09)	16 (6.06)
36.0~36.1°	13 (16.25)	12 (15.19)	4 (16.00)	2 (11.11)	6 (27.27)	6 (20.69)	2 (18.18)	45 (17.04)
36.2~36.3°	9 (11.25)	10 (12.66)	3 (12.00)	3 (16.67)	4 (18.18)	7 (24.14)	2 (18.18)	38 (14.39)
36.4~36.5°	13 (16.25)	8 (10.13)	7 (28.00)	2 (11.11)	2 (9.09)	3 (10.34)	—	35 (13.26)
36.6~36.7°	14 (17.50)	10 (12.66)	3 (12.00)	5 (27.78)	1 (4.54)	3 (10.34)	1 (9.09)	37 (14.02)
36.8~36.9°	15 (18.75)	13 (16.45)	2 (8.00)	—	—	—	1 (9.09)	31 (11.74)
37.0°~	14 (17.50)	15 (18.99)	2 (8.00)	3 (16.67)	1 (4.54)	2 (6.90)	—	37 (14.02)
計	80 (100.00)	79 (100.00)	25 (100.00)	18 (100.00)	22 (100.00)	29 (100.00)	11 (100.00)	264 (100.00)
体 温	女							計
	0~9才	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~	
~35.5°	2 (1.64)	4 (5.80)	4 (4.94)	7 (8.54)	7 (9.33)	2 (6.90)	1 (10.00)	27 (5.77)
35.6~35.7°	3 (2.46)	2 (2.90)	4 (4.94)	4 (4.88)	8 (10.67)	3 (10.34)	—	24 (5.13)
35.8~35.9°	3 (2.46)	8 (11.59)	3 (3.70)	7 (8.54)	6 (8.00)	2 (6.90)	2 (20.00)	31 (6.62)
36.0~36.1°	19 (15.57)	13 (18.84)	11 (13.58)	12 (14.63)	12 (16.00)	6 (20.69)	2 (20.00)	75 (16.03)
36.2~36.3°	15 (12.30)	10 (14.49)	16 (19.75)	11 (13.41)	12 (16.00)	4 (13.79)	1 (10.00)	69 (14.74)
36.4~36.5°	17 (13.93)	6 (8.70)	11 (13.58)	10 (12.20)	10 (13.33)	5 (17.24)	2 (20.00)	61 (13.03)
36.6~36.7°	24 (19.67)	5 (7.25)	12 (14.82)	14 (17.07)	7 (9.33)	1 (3.45)	1 (10.00)	64 (13.68)
36.8~36.9°	15 (12.30)	11 (15.94)	8 (9.88)	5 (6.10)	8 (10.67)	2 (6.90)	1 (10.00)	50 (10.68)
37.0°~	24 (19.67)	10 (14.49)	12 (14.81)	12 (14.63)	5 (4.67)	4 (13.79)	—	67 (14.32)
計	122 (100.00)	69 (100.00)	81 (100.00)	82 (100.00)	75 (100.00)	29 (100.00)	10 (100.00)	468 (100.00)

第5表 性別年齢別低体温者

性別	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~	計
男子	2.50	13.92	16.00	16.66	36.37	27.59	45.46	15.53
女子	6.56	20.29	13.58	21.96	28.00	24.14	30.00	17.52
計	4.96	16.89	14.15	21.00	29.90	25.86	38.00	16.80

の動揺もわからないので、 36°C に達しない者の % を示してみた。体温の比較的高い年齢、即ち、0~9 歳に於ても、男子 2.5%、女子 6.56% を示し、年齢の増加に伴い低体温者の割合は次第に増加しており、60 歳以上では、男子 45.5%、女子 30.00% に達し、非常に高率を示している。ただ、女子において 10 歳代と 20 歳代が異例的に逆になつてはいるが、その他は年齢増減と低体温者の割合の増減と全く一致している。

これに対し、第4表よりあきらかなごとく、 37°C 以上の者は 0~9 歳までの当然かなりの率を予想される年齢においても男女とも 20% に達しては、若青年期には平熱として微熱所有者の相当に存在することがあきらかなるにも拘らずいずれも低率である。性別年齢別については戦前のそれと比較することは煩雑となりすぎるから、1例を挙げ

て参考に供しよう。即ち、河合による⁽⁶⁾ 37.1°C 以上の所謂微熱者の率は高等女学校生徒 14~19 歳において $68.22 \pm 1.09\%$ を示しているに反し、本調査の 10~19 歳のそれは 14.49% に過ぎない状態である。したがつて本調査では 37°C を含めて当時の約 1/5 弱となり、非常に微熱者の割合が小となつてはいる。但し、河合⁽⁶⁾ 及び後述する吉岡等⁽⁶⁾ における調査方法は最高体温を求めべく最善をつくされてはおり、筆者等のそれは時間的余裕なく粗雑な方法によるものであるから、当然筆者等の方が低き値を示していることは予想される。しかしかかる点を考慮に入れても最近の体温は低きにすぎるものと思われる。

ついで、一応平均値についての観察を試みておこう。性別年齢別平均体温を、つぎの第6表に示す。これによると、算術平均についてみるに、男

第6表 性別年齢別体温平均値

性別	平均値	0~9才	10~19才	20~29才	30~39才	40~49才	50~59才	60才~
男子	$\bar{x} \pm \text{S. E. } \bar{x}$	36.51 ± 0.09	36.35 ± 0.03	36.29 ± 0.04	36.32 ± 0.05	36.05 ± 0.04	36.05 ± 0.04	36.04 ± 0.06
	Md	36.52	36.38	36.32	36.35	35.95	36.10	35.92
	Mo	36.54	36.44	36.46	36.41	35.75	35.88	36.40
	$\text{S}\bar{x} \pm \text{S. E. } \text{S}\bar{x}$	0.77 ± 0.06	0.23 ± 0.11	0.20 ± 0.03	0.22 ± 0.04	0.20 ± 0.03	0.20 ± 0.03	0.21 ± 0.04
女子	$\bar{x} \pm \text{S. E. } \bar{x}$	36.38 ± 0.02	36.40 ± 0.04	36.32 ± 0.02	36.29 ± 0.03	36.23 ± 0.03	36.15 ± 0.04	36.12 ± 0.06
	Md	36.50	36.17	36.32	36.30	36.13	36.13	36.10
	Mo	36.74	35.72	36.32	36.32	36.53	36.21	36.18
	$\text{S}\bar{x} \pm \text{S. E. } \text{S}\bar{x}$	0.24 ± 0.02	0.31 ± 0.03	0.22 ± 0.02	0.24 ± 0.02	0.26 ± 0.02	0.24 ± 0.03	0.20 ± 0.04
合計	$\bar{x} \pm \text{S. E. } \bar{x}$	36.39 ± 0.01	36.33 ± 0.02	36.31 ± 0.02	36.30 ± 0.02	36.25 ± 0.02	36.25 ± 0.03	36.07 ± 0.04
	Md	36.51	36.32	36.32	36.30	36.34	36.11	35.96
	Mo	36.03	36.30	36.34	36.30	36.52	35.83	36.40
	$\text{S}\bar{x} \pm \text{S. E. } \text{S}\bar{x}$	0.02 ± 0.01	0.26 ± 0.02	0.22 ± 0.02	0.24 ± 0.02	0.23 ± 0.02	0.22 ± 0.02	0.21 ± 0.03

子では、 36.04°C より 36.51°C の間にあり、多少の動揺はみとめられるが、大体年齢の若き者において高く、年齢の多きものは低い傾向がみられる。しかして、正常範囲を $\bar{x} \pm \text{S}\bar{x}$ として観察す

るに、吉岡等⁽⁶⁾ の成績と比較してみると、正常範囲の上界が従来はすべて 37°C 以上になつてはいるが、本調査の成績では、男子 0~9 歳の上界が、 37.28°C となる他はいずれも 36°C 代にあり、女

子における 10~19 歳の 36.09~36.71°C が次位である。この年齢における河合 (5) の調査では 36.36~37.48°C であつて、上界において 0.77°C の著明な低下がみられ、下界において 0.27°C の低下がみられる。また、吉岡等 (6) によると、下界が 36°C 以下のものは見うけられないが、本調査では男子の 50 歳代をのぞき男女とも下界が 35°C 代となつている。これらの事実よりしても少くとも従來の体温より一般に低下を來しているこ

とだけは言えるであろう。

3) 脈搏よりみたる身体状況について

一般都内住民の脈搏数について 60 以下の者の割合だけでなく、現在いかなる状態にあるかについてみるべく、性別年齢別の度数分布表を作製してみた。これを次の第 7 表に掲げる。

まず、脈数 60 以下の遅脈を示すものを性別年齢別にみると、下表によりあきらかなごとく、男子は 50 歳代が約 10%、ついで、30 歳代及び

第 7 表 性別年齢別脈搏度数分布表

(男 子)

脈 数	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~	計
~ 55	—	1 (0.85)	—	1 (3.85)	—	3 (7.32)	—	5 (1.26)
55 ~ 60	—	1 (0.85)	1 (3.03)	1 (3.85)	1 (3.33)	1 (2.44)	1 (7.69)	6 (1.51)
60 ~ 65	—	6 (5.13)	1 (3.03)	—	8 (26.67)	6 (14.63)	—	21 (5.28)
65 ~ 70	—	9 (7.69)	6 (18.18)	5 (19.23)	6 (20.00)	13 (31.71)	4 (30.77)	43 (10.80)
70 ~ 75	2 (1.45)	12 (10.26)	12 (36.37)	5 (19.23)	4 (13.33)	4 (9.76)	3 (23.08)	42 (10.55)
75 ~ 80	8 (5.80)	22 (18.80)	3 (9.09)	6 (23.07)	5 (16.67)	5 (12.19)	1 (7.69)	50 (12.56)
80 ~ 85	9 (6.52)	18 (15.39)	2 (6.06)	6 (23.07)	5 (16.67)	7 (17.07)	2 (15.39)	49 (12.31)
85 ~ 90	7 (5.07)	6 (5.13)	3 (9.09)	1 (3.85)	—	1 (2.44)	—	18 (4.52)
90 ~ 95	24 (17.39)	16 (3.68)	1 (3.03)	—	—	—	1 (7.67)	42 (10.55)
95 ~ 100	20 (14.49)	9 (7.69)	3 (9.09)	1 (3.85)	1 (3.33)	—	—	34 (8.54)
100 ~ 105	15 (10.87)	8 (6.84)	—	—	—	1 (2.44)	—	24 (6.03)
105 ~ 110	14 (10.15)	5 (4.27)	1 (3.03)	—	—	—	1 (7.67)	21 (5.28)
110 ~ 115	11 (7.97)	2 (1.71)	—	—	—	—	—	13 (3.27)
115 ~ 120	10 (7.25)	—	—	—	—	—	—	10 (2.51)
120 ~ 125	11 (7.97)	1 (0.85)	—	—	—	—	—	12 (3.02)
125 ~ 130	4 (2.90)	1 (0.85)	—	—	—	—	—	5 (1.26)
130 ~ 135	1 (0.73)	—	—	—	—	—	—	1 (0.25)
135 ~	2 (1.44)	—	—	—	—	—	—	2 (0.50)
計	138 (100.00)	117 (100.00)	33 (100.00)	26 (100.00)	30 (100.00)	41 (100.00)	13 (100.00)	398 (100.00)

(女 子)

脈 数	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~	計
~ 55	—	—	—	—	2 (2.41)	1 (2.22)	—	3 (0.48)
55 ~ 60	—	—	—	1 (0.96)	2 (2.41)	3 (6.67)	—	6 (0.96)
60 ~ 65	1 (0.56)	5 (5.21)	4 (3.92)	6 (5.77)	10 (12.05)	5 (11.11)	—	31 (4.96)
65 ~ 70	3 (1.67)	3 (3.12)	12 (11.77)	11 (10.58)	7 (8.43)	4 (8.89)	4 (26.67)	44 (7.04)
70 ~ 75	5 (2.78)	9 (9.38)	14 (13.73)	23 (22.12)	13 (15.66)	14 (31.11)	1 (6.67)	79 (12.64)
75 ~ 80	10 (5.56)	12 (12.50)	15 (14.71)	14 (13.46)	16 (19.28)	7 (15.56)	5 (33.33)	74 (11.84)
80 ~ 85	7 (3.89)	17 (17.71)	20 (19.61)	20 (19.23)	12 (14.46)	9 (20.00)	2 (13.33)	90 (14.40)
85 ~ 90	20 (11.11)	7 (7.29)	12 (11.76)	12 (11.54)	13 (15.66)	2 (4.44)	2 (13.33)	55 (8.80)
90 ~ 95	26 (14.44)	12 (12.50)	7 (6.86)	8 (7.69)	2 (2.41)	—	1 (6.67)	50 (8.00)
95 ~ 100	28 (15.56)	21 (21.88)	9 (8.82)	7 (6.73)	2 (2.41)	—	—	65 (10.40)
100 ~ 105	20 (11.11)	3 (3.12)	6 (5.88)	2 (1.92)	2 (2.41)	—	—	41 (6.56)
105 ~ 110	19 (10.56)	4 (4.17)	—	—	2 (2.41)	—	—	26 (4.16)
110 ~ 115	5 (2.78)	2 (2.08)	2 (1.96)	—	—	—	—	23 (3.68)
115 ~ 120	16 (8.89)	1 (1.04)	—	—	—	—	—	6 (0.96)
120 ~ 125	9 (5.00)	—	1 (0.98)	—	—	—	—	17 (2.72)
125 ~ 130	5 (2.78)	—	—	—	—	—	—	9 (1.44)
130 ~ 135	3 (1.67)	—	—	—	—	—	—	3 (0.48)
135 ~	3 (1.67)	—	—	—	—	—	—	3 (0.48)
計	180 (100.00)	96 (100.00)	102 (100.00)	104 (100.00)	83 (10.000)	45 (100.00)	15 (100.00)	625 (100.00)

60 歳以上が約 8% であつて、40 歳代では 3% 余となつてゐる。また、女子では 50 歳代の約 9% が最高にして、次が 40 歳代の約 5%，ついで、30 歳代の約 1% がみとめられる。これらによつて、男子の方が女子よりやや遅脈の発現率が高い感がある。しかして、第 7 表より性別年齢別に各平均値を求むるに次に示す第 8 表の如くである。すなわち、これによつてあきらかなごとく、60 歳以上を除外すれば、年齢の増加に伴い脈数は減少してゆき、性別については平均値よりみるも常に

女子が男子より脈数多く、大体 0.6~6.0 の開きをみせていることがわかる。

4) 血圧よりみたる身体状況

最近の一般住民の血圧低下についてはすでに平均値の上から及び個人的な観点から本報告(その 3)において報告せしところである。かくて今回は少しく詳細に血圧分布の上から観察を加えておこうと思う。血圧のみに関する調査研究の結果は特に総括的報告をさきに発表した(7), 分布については煩雑をさけ簡略にしたので、ここにその詳

第 8 表 性別年齢別脈膊平均値

性	平均値	0~9才	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	90~
男	$\bar{x} \pm S. E. \bar{x}$	102.3 \pm 1.25	84.6 \pm 1.32	77.1 \pm 1.90	75.0 \pm 1.96	72.0 \pm 1.72	68.4 \pm 1.88	75.8 \pm 3.28
	Md	99.6	83.0	75.5	75.3	70.0	68.6	73.7
	Mo	94.2	79.8	72.3	75.9	66.0	69.0	69.5
	$Sx \pm S. E. sx$	2.86 \pm 0.17	2.69 \pm 0.18	2.26 \pm 0.28	2.05 \pm 0.28	1.79 \pm 0.23	2.06 \pm 0.23	2.50 \pm 0.47
女	$\bar{x} \pm S. E. \bar{x}$	103.2 \pm 1.23	87.7 \pm 1.25	82.8 \pm 1.25	79.7 \pm 0.97	77.9 \pm 1.17	73.6 \pm 1.43	76.4 \pm 2.85
	Md	102.6	87.8	81.8	79.0	77.0	74.4	75.7
	Mo	101.4	88.0	79.8	77.6	75.2	76.0	74.3
	$Sx \pm S. E. sx$	3.07 \pm 0.16	2.48 \pm 0.18	2.42 \pm 0.17	2.02 \pm 0.14	2.33 \pm 0.18	1.68 \pm 0.18	1.55 \pm 0.28

細を發表するものである。

さて、性別年齢別最高及び最低血圧の各分布を戦前のものと今回のそれとを、つぎの第1図より第4図を掲げ、両者を比較検討してみよう。(戦前のものとしては日吉⁽⁸⁾、一色⁽⁹⁾による昭和7年より同15年までの調査を用いた。)

まず、男子最高血圧分布図をみると第1図(その1)の年齢中央値10歳では、大体において曲線は10mmのずれがみられる。(その2)の15歳になると10mmのずれのあることに変りはないが、本曲線が前述の曲線よりやや低い方へ歪んでずれている。(その3)の20歳については(その2)までのずれ方より全体的に可成り著明となり、分布範囲も30mmも狭少となつている。(その4)の40歳をみるに、さらに分布範囲が著しく狭少となり、90、100mmのかつては極めて少なかつた部分に今回は相当分布していることがわかる。(その5)の50歳については、最高峯のずれは依然として20mmではあるが、今回では110mmにて半数近きものが分布しているに對しかつてのそれは110mmにては約15%程度の分布にとどまつている。

つぎに女子の最高血圧についてみよう。第2図(その1)及び(その2)における10歳及び15歳については、大体において男子の場合と大差ないので記述することをひかえ、(その3)の20歳についてのべる。分布図よりあきらかであるが、男子では20歳にいたると若年者より低い方へ多く分布する様になるに反して、女子では逆に曲線のずれが小となる傾向があり、わずかにずれる程

度である。すなわち、性別年齢別の最高血圧に関しては最も影響少きものといえよう。(その4)における40歳をみるに、40歳になると、再び男子のそれに類似するにいたり、分布範囲は高き部において50mmも狭少となつておる。(その5)の50歳においても、男子のずれよりやや少く、その他は男子のそれと大差なきものである。

つぎには、最低血圧についてみるに、第3図及び第4図より一見してあきらかなごとく、最高血圧にみられた如き著明なる差はみられず、分布範囲も同程度乃至、わずかに小となれるものであつて、曲線のずれも決して著明なるものでないことがわかるであらう。

即ち、以上によつて血圧分布に関しては一般に低い方へずれていること、特に最高血圧において著明であり、最高血圧の高き部において分布が極めて狭少となれる事実は見遁し難きものであると思ふ。

IV 總括並びに結論

新宿区(旧牛込区)における身体的栄養状態について昭和21年5月より同22年8月にいたる検診の結果、今回の調査について總括するに次の如くである。被検者は各項目によりことなるも全員1382名である。

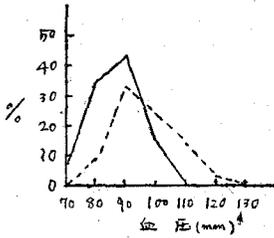
i) 性別症候別栄養状態

前記13項目の有症率中体重減少が第1位にして約54%、ついで母乳分泌不良の約43%、腱反射消失及び貧血の約29%、月経異常の約27%、浮腫の約24%、口角炎の約14%がつづき、その

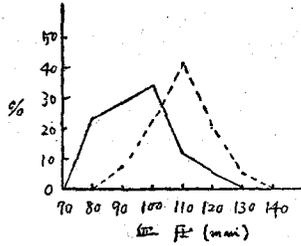
第1圖 男子最高血圧

—— 今回
----- 前

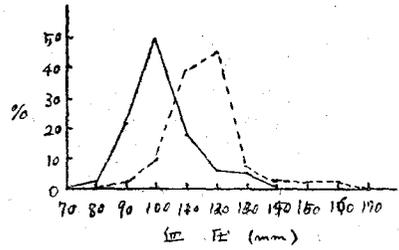
(4の1) 10才



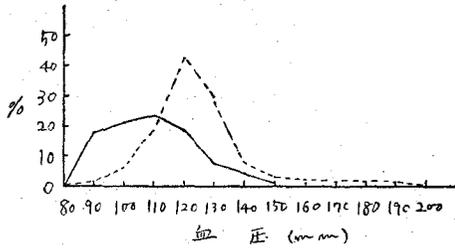
(4の2) 15才



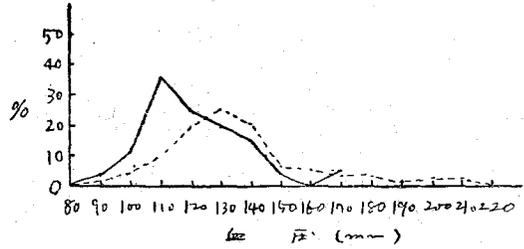
(4の3) 20才



(4の4) 40才



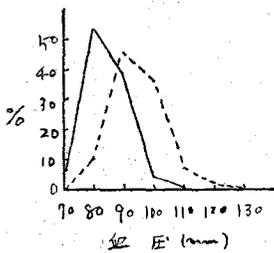
(4の5) 50才



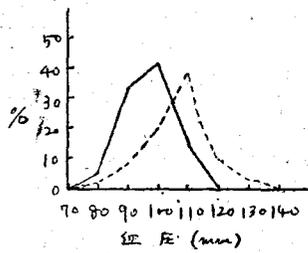
第2圖 女子最高血圧

—— 今回
----- 前

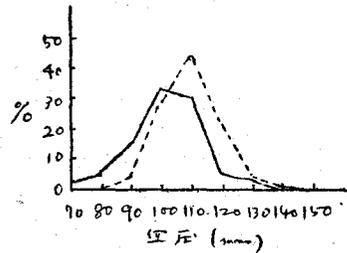
(4の1) 10才



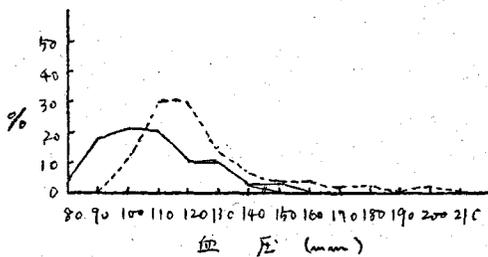
(4の2) 15才



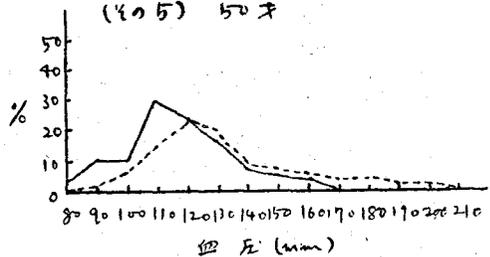
(4の3) 20才



(4の4) 40才

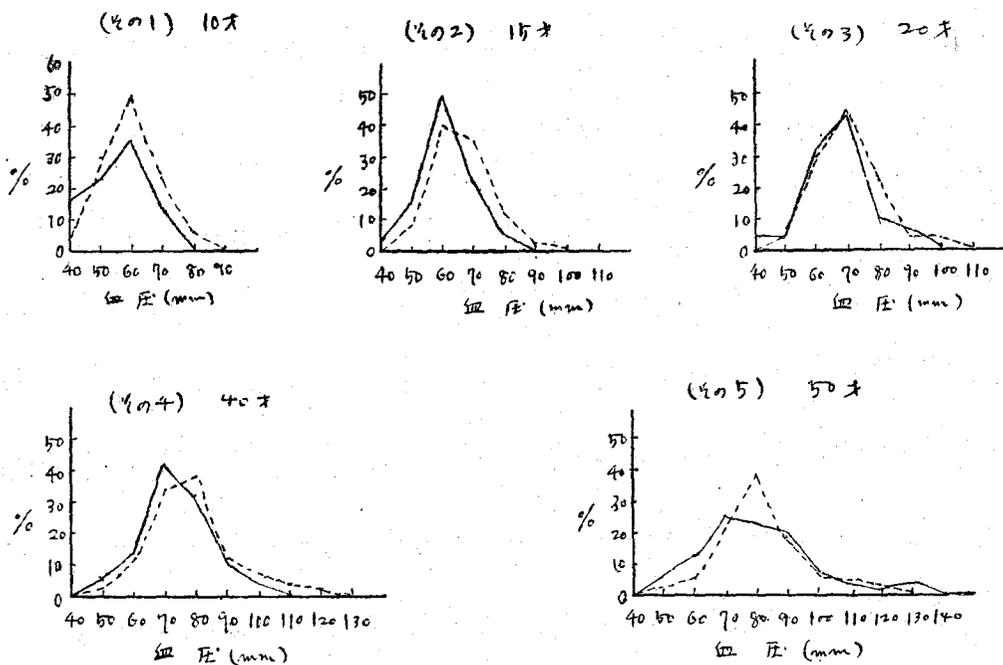


(4の5) 50才



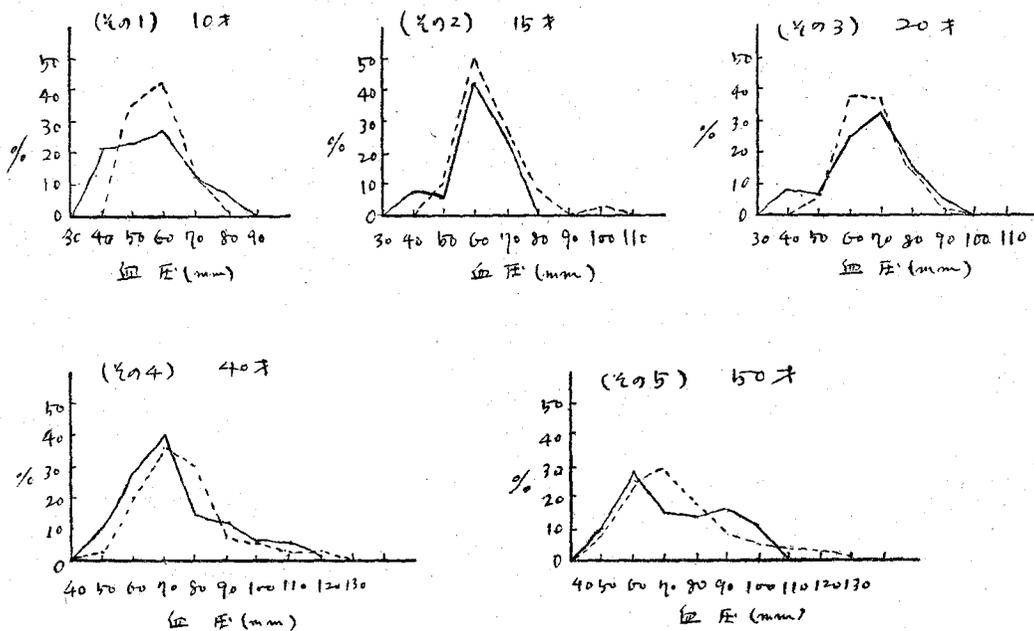
第3圖 男子最低血圧

—— 今回
----- 戦前



第4圖 女子最低血圧

—— 今回
----- 戦前



他は何れも5%以下の僅少なるものである。

性別の差異についてみるに、男子に高率を示すものは慢性下痢、口角炎、体重減少であり、女子に高率を示すものは浮腫、腱反射消失において最も著明にして、これらは男子との間に有意の差を示し、その他貧血、毛孔性角化症も女子において高率である、なお、男子の一人当たり有症数は1.4であり、女子は1.9であつて0.5症状女子の方が多い。

ii) 体温測定値についてみるに、低体温者即ち、 36°C に達せざるものが非常に多い。しかし低体温者の割合は年齢の増加に伴い増加しており、最小は男子の0~9歳までの2.5%より最大は男子60歳以上の約45%にまで達している。また一方 37°C 以上の微熱所有者の割合が、若青年期においても極めて僅少に止ることがあきらかである。平均値よりみると男子 $36.04\sim 36.51^{\circ}\text{C}$ の間にあり、女子では $36.12\sim 36.4^{\circ}\text{C}$ の間にあり、測定方法がことなり多少それらの点を考慮に入れても過去のそれより低くなつてゐる。

iii) 脈搏について観察すると、年齢の増加に伴い脈数は減少しているが、60歳以上では再び増加の傾向を示している。平均値よりみると、各年齢群において常に女子の方が脈数多く、大体0.6~6.0の開きをみせてゐる。

iv) 性別、年齢別の血圧分布について検するに10歳、15歳の若年者では男女の差異は少く、大体戦前の分布と比較し曲線は低い方へ10mmのずれを示している。20歳にいたると、男子ではやや曲線のずれが著明となり、しかも分布範囲が狭少となるが、女子ではわずかにずれる程度に止る。さらに40歳以上に達すると、男女とも再び

類似するにいたり、全体的に低い方へずれることは勿論、分布範囲が150mm以上の高き部が今回は極めて少であり、分布範囲が40、50mm程度も従来より狭少となつてゐる。即ち、高血圧が著しく僅少となれることを示している。最低血圧についても勿論低下はみられるが、最高におけるが如き著明なる傾向及び特長はみられない。

稿をおわるにあたり、終始御懇篤なる御指導と御校閲を賜つた吉岡博人教授に深甚の感謝の意を表する。

文 献

- 1) 日比貞子：牛込區に於ける身体的栄養状態調査報告(その1)，女子医学研究，第20巻，第1号，17—22頁，昭和25年2月。
- 2) 日比貞子：同上(その2)，厚生科学，第8巻，第2号，88—95頁，昭和24年5月。
- 3) 日比貞子：同上(その3)，女子医学研究，第20巻，第3,4号，114—123頁，昭和25年10月。
- 4) 有本邦太郎：国民栄養の現状，公衆衛生学雑誌第3巻，第2号，第1回公衆衛生学会特集号，8—12頁，昭和22年2月。
- 5) 河合君子：高等女学校生徒の体温に関する調査，東京女医学会雑誌，第7巻，第3号，211—242頁，昭和12年7月。
- 6) 吉岡博人：本邦女子の体温に関する知見，東京女医学会雑誌，第11巻，第1号，23—43頁，昭和16年2月。
- 7) 日比貞子：最近における日本人の血圧値について，総合医学，第5巻，第6号，238—240頁，昭和23年4月。
- 8) 日吉次郎：日本人の血圧に関する統計的研究，保険医学雑誌，第42巻，第3号，昭和16年11月。
- 9) 一色嗣武：日本人女子の血圧に関する研究，保険医学雑誌，第73巻，第2号，昭和19年10月。